

☆「きさ」教育だより☆（保小中高の取組紹介）

吉舎中学校区では「表現力の育成」に力を入れています。

「表現力」を子供たち一人一人が自分らしく自分の生きる道を選択していくために必要な力の一つであると考え、中学校区だけでなく、吉舎保育所、敷地保育所、日彰館高校ともに、「表現力」を大切にしています。そして、表現力を育成する柱の一つとして「考え・議論する道徳」を広島大学大学院人間社会科学研究科 宮里智恵教授の指導を受けながら、今年度も研究しています。

授業の一コマを紹介します。



「さと子の落とし物」～友だちを思って～

【内容項目】友情・信頼

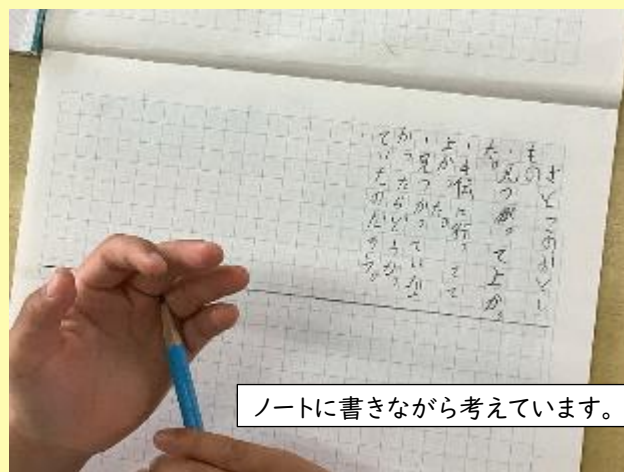
令和6年6月19日 吉舎小学校 3年



「友だちが悲しかったら自分も悲しくなるし、友だちがうれしかったら、うれしくなる。」

鍵を落として困っている中心人物さと子にすぐに助けようとする友だち、自分たちの「遊びたい」気持ちと葛藤する友だち、それぞれの心情を考えることを通して、友だちを思って行動することのすがすがしさに気付く授業でした。

私たちは、小さい時から助けたり助けられたり、優しくしたり優しくされたり、そんなことを繰り返し、その時の自分の気持ち、相手のうれしそうな顔から友だちっていいなという思いを育てて



ノートに書きながら考えています。

いくのだと、子どもたちのやり取りから感じました。

宮里教授からも、「助けることはいいことだけど、やりたいことだったり、機嫌の悪さだったり、それぞれ都合があって、それでも助けると決心したとき、自分で決めたからこそ、困っている友達を助けるのはうれしいことだと感じるのではないのでしょうか。『そうありがたいね。』と子どもたちと共感して終わる授業もありますね。」と講評を受けました。

「一冊のノート」～家族を支える私の在り方～

【内容項目】家族愛・家庭生活の充実

令和6年10月25日 吉舎中学校 3年生



老いていく祖母と同居する主人公「僕」は、認知症で物忘れがひどくなった祖母に、疎ましさを腹立たしさを感じ、時にひどい言葉を投げかけていました。ところがある日、自分でも記憶がどうにもならないもどかしさやこれから先の不安が切々と書き込まれた祖母の一冊のノートを目にします。いたたまれない思いになった「僕」の行動、その思いについて考える授業でした。

2人の先生で役割分担をして提示される教材は、心に染み入るようで、それだけで主人公の気持ちに寄り添うことができました。宮里教授からは、学級の雰囲気が温かく、生徒たちが大切に育てられていると感じること、だからこそ『申し訳なさ』『手助けしよう』のレベルから『家族を支える自分の在り方』まで深めることを目指したいですね。』というお話がありました。

道徳科の時間に考えたことは、その時間に答えが出て終わるわけではなく、その後の授業を含めた生活の中で、もう一度考えたり、体験したりしたときにそれぞれの価値観として育っていくものだと思います。そういう教科としての特性を踏まえ、道徳科を中心に他教科や特別活動と結び付けた「学習プログラム」を作っています。また、様々な体験活動においても、道徳性は培われています。下記の八幡小学校の取組は、「文化の尊重・郷土愛」、さらには「勇気・努力」といった心も育てていると思います。

「あーとあい・吉舎」で「小学生学芸員」にチャレンジ

令和6年10月1日 八幡小学校 全児童

八幡小学校では、地域の人・もの・ことを題材にして教材づくりを続けてきています。その活動をぜひ披露して欲しいとあーとあい・吉舎から依頼を受け、個展を開かれていた長谷川雅敏さんらに、奥田元宋先生や小由女先生の作品紹介や制作活動について、鑑賞活動を生かした図画工作科の学習について、小由女先生との交流について等説明しました。

来館者の方から、これまでの学習の成果や表現力を高く評価してもらいました。



11月15日「きさ」教育の日は、保育所から高校まで集まります！

〈文責：「きさ」小中一貫教育推進協議会 11月号担当 吉舎小学校 次川麻美〉